【学際活動】第 29 回日本災害医学会総会・学術集会で研究成果を報告しました（2024/2/22-24）

テーマ：「叡智の結集：すべては被災者のために」、令和６年能登半島地震
会　場：京都市勧業館 みやこめっせ（京都府京都市）

災害医学研究部門の江川新一教授、佐々木宏之准教授、博士２年生の坪井基浩氏（３名とも災害国際協力研究分野）、朴慧晶助教（災害医療情報学分野）は、2024 年２月 22-24 日、京都市勧業館みやこめっせ（京都府京都市）で開催された「第 29 回日本災害医学会総会・学術集会」に参加し、特別企画登壇、シンポジウム座長、研究成果発表などを行いました。本学術集会のテーマは「叡智の結集：すべては被災者のために」で、医療関係者のほか現場対応に従事する救急消防関係者、行政職員（国、都道府県、市町村）、ボランティア関係者など組織、団体、政府、市民、ボランティアなど約 3000 名が参加し、特別講演、特別企画などを含めて 170 のセッションが企画されました。

本学術集会において、江川教授は、WHO 健康開発総合研究センターフォーラムおよび世界災害救急医学会（WADEM）特別企画に登壇して災害医療・医学に関わる研究と防災での健康中心の考え方・国際的な災害医療での日本の役割について議論しました。佐々木准教授は、シンポジウム「災害研究機関」で企画運営・座長を務め、災害研究機関の果たすべき役割、あり方について発表者等の見解をまとめ報告しました。また社会医学系専門医検討委員会委員として、学術集会での指導医講習会、K 単位講習会等の運営を中心的に担いました。避難所をテーマとする一般演題口演では、朴助教が「個別避難戦略の尊厳と災害医療サービス」のタイトルで災害時の個別避難決定に関わる尊厳と災害医療支援について、坪井氏は「医療者から見た日本の災害関連死が抱える制度上の問題」のタイトルで災害関連死に関わる現在の制度の問題点と将来の方向性について発表しました。

令和６年能登半島地震緊急報告会では、発災時から現場で活動し続けている関係者からの真に迫る支援活動報告がありました。災害医療に関わるロジスティクスの遅延、医療支援者の休息・食事の問題などが報告されました。これらを解決するために、今後災害医療に関わる実践的研究が必要であり、災害医学研究部門は災害に強い社会づくりに貢献します。

WHO 健康開発総合研究センターフォーラムの関係者と江川教授

朴助教の発表の様子

坪井氏の発表

文責：朴慧晶（災害医療情報学分野）
江川新一・佐々木宏之（災害医療国際協力学分野）